

横浜市立大正小学校 令和2年度学力向上アクションプラン

1 学校の状況

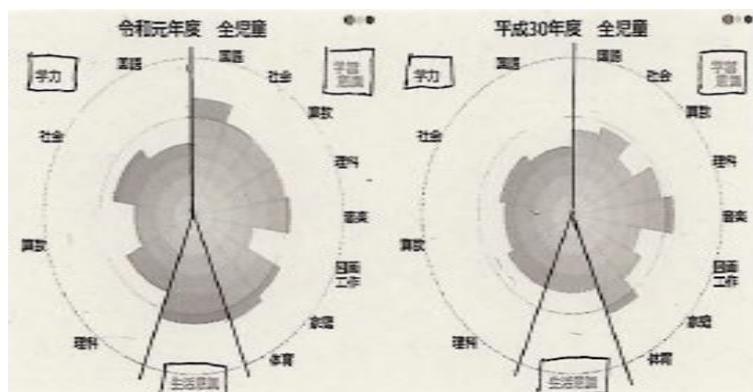
- 親しみをもって、進んで他者とかがわる姿が多く見られる。
- 週1回、朝読書の時間や読み聞かせの時間を設定しており、休み時間等にも本に親しむ姿が見られる。
- 中学校ブロックと連携し、全校での「あいさつ運動」に引き続き取り組んでいる。

2 今年度の方向

学校教育目標の実現に向け、学習指導要領の改訂に基づく教育課程の見直しと、授業力向上を目指した校内研究授業（算数科）を推進することにより、いきいきと活動する子どもの育成を目指します。

- ・朝学習や朝読書の充実を図り、基礎・基本の定着、言葉を介した想像力の育成に努めることにより、子どものやる気を高めます。
- ・学校中から音楽が自然と聴こえてくるよう、毎日の朝の会で歌う場面や月に一度の音楽朝会を設定し、感受性豊かな子どもの育成に努めます。
- ・個人や集団での「なわとびタイム」を設定したり、給食の指導を継続したりすることにより、心身ともに健康な子供の育成を図ります。
- ・対話的な学習の場を設定することで、子どもたちの「わかる・できる」といった自己肯定感を実感させ、主体的な学びや基礎基本の定着につなげていきます。

3 横浜市学力学習状況調査等からの令和元年度の実態把握



(1) 学力と学習・生活意識の状況

【学力】全学年、全教科において低下している傾向である。特に算数の低下が著しい。

【学習意識】H30年度と比べ平均値に達した教科が大幅に増えた。主要4教科では国語科、算数科での高まりが著しい。

【生活意識】H30年度、及びそれ以前と比べても最も高い結果となり、平均値を超えた。

(2) 教科学習の状況

【国語科】H30年度に引き続き「知識・理解・技能」の基礎的な内容では、安定した力が保たれている。一方、3つの能力については各学年においてそれぞれ低下が見られる。考えを書いたり読んで理解したりする問題が苦手である。

【算数科】全学年で3観点の内容に低下がみられる。基礎的な内容も定着が不十分であり、設問の内容を正しく理解して答える問題においても課題が見られる。

【社会科】人物や事柄の名称等、知識はあるが、それらを関連付けて考えたり発展させて考えたりすることは難しい。

【理科】観察や実験を通じて、知識や技能を身に付けることはできている。根拠に基づいて思考する力に高まりが見られる。

(3) 経年変化の状況と要因の分析

学習意識が飛躍的に伸びた国語科と算数科では、やる気は十分に見られるが学力が定着していないという状況が分かる。特に算数科は全学年で、計算の仕組みや図形の成り立ちを理解して問題を考えたり、身に付けた知識や技能を応用して数学的に考えたりする力が著しく低下している。今年度は算数科を重点研究で取り上げ、対話的な学びのあり方を追求し、身に付けた内容をもとに考えを深めていける子どもの育成を目指す。家庭との連携も重視しながら学力向上を図る。

4 令和2年度 目標と具体的方策

令和2年度 研究テーマ

できる・わかる喜びを味わい、進んでかかわり合う子の育成

～対話的な学びが、考える楽しさにつながる授業づくり～

(1) 学校の取組み

○確かな学力

全教育活動を通じた日本語教育への取組、及び、朝読書、俳句の創作活動を通じた日本語教育を進めます。小中一貫カリキュラム、及び、学校教育目標「やる気いっぱい 笑顔いっぱい 大正小」、3つの資質・能力「主体的に問題解決する力」「豊かな心」「社会で生きる力」の実現に向けた日々の授業改善の取組、個に応じた教育の充実や能力に応じたワークシート等の活用を通し、子どもが進んで課題を見つけ主体的にその解決に向かう姿勢を育てていきます。

○特別支援教育の充実

「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」をもとに、誰もが「わかる」ユニバーサルデザイン化を意識した授業を実践します。特別支援教室（取り出し学習）の一層の充実を図り、個に応じた指導を推進します。

○児童・生徒指導

「大正小学校のやくそく」を児童、保護者、教職員がしっかりと理解し、互いに安心して過ごせるよう努めます。小中一貫ブロックでの情報共有を日常化し、スタンダードの一貫性を図ります。

(2) 学年の取組

第1学年

- 体験的な学習活動を重視し、実感を伴った語彙の獲得、数の概念の獲得を目指す。
- ねらいや見通しを明確にし、一人ひとりが分かる授業づくりや支援の工夫を行う。
- 自分の思いを伝えることができるように、表現活動の場を意図的・計画的に設定する。

第2学年

- 体験的な学習活動を重視し、既習事項を大切にしながら、基礎学力の定着を図る。
- 自分の思いや考えを相手に伝え、友達の思いや考えを聞いてそのよさに気付くことなど、対話を通して学ぶ楽しさを実感できるようにする。

第3学年

- 体験的な活動を取り入れることにより、発見する喜びや、学ぶ楽しさを一人ひとりが実感できるようにする。
- ペア学習やグループ学習など、話し合う活動を取り入れ、自分の考えを伝えたり、友達の考えを聞いたりして、よりよいものを目指す姿を育む。

第4学年

- 友達の考えを聞いたり言葉で表現したりする場面を設定し、粘り強く答えを導き出すことができる学びを目指す。
- 特に算数科に対する意識の向上を図るため、自分の考えとの共通点を見つけながら、自分の思いを伝え合う活動を取り入れる。

第5学年

- 課題に対して自分で考え判断する力を身に付けるために、友達と考えたり自分で判断したりする場面を意図的に設定する。
- 特に算数科では一人ひとりの力を伸ばしていく必要があるため、少人数や習熟度別の授業形態等を取り入れる。

第6学年

- 全体的に少しずつ市の平均に近づいている中、算数の活用だけが下がっている。基礎基本の定着に課題があるため、既習事項もスモールステップになるような家庭学習を取り入れる。
- 理科の意識低下が見られるため、身近な事象や経験と関連付けながら興味関心がもてるようにする。

個別支援学級

- 日常生活に生きるような体験的活動を取り入れた学習を通して、関心をもって課題に取り組むことができるように支援する。
- 自分の思いをもち、それを相手に伝える、あるいは反応する（表情・仕草・ハンドサインなど）ことで、関わり合いを大切にしたい学びを目指す。